「昭和7年の雨乞い　豊川地区編」（抜粋）
『イワケシュ郷土史』（昭和49年2月発行）掲載

（略）昭和7年は、まさに日照りに悩まされた年であった。この年は、春以来の良い天気に恵まれて作物の生育は極めて順調であり、加えて農作業も手順良くはかどり、農民にとっては先の見通しが明るかった。ところが、春も中頃から雨らしい雨はさっぱり降らず、畑も風が吹けば土ぼこりが舞い上がり、草取りをすればあたかも灰の中をかき回すような状態であり、作物ばかりではなく野道の草も生気を失い、人畜草木にいたるまでしおれてしまうような姿を迎えたのであった。

　ことここにいたって、時の村長佐藤満三（昭和7年6月4日　興部村書記から常呂村村長に発令「当直日誌」）は、各部落へ雨乞いをするよう指示をした。川沿の区長岡崎重吉も真剣になって部落民へ呼びかけたのである。部落農民一同も日照りとはいえ、毎日の好天気続きのため農作業も予定以上にはかどっていたので、某日の昼さなかに巖地神社へ集合し、宮司三角武を迎えて祈祷を始めた。

　一同うやうやしく真心を込めて3回ほど祈った。しかし、残念ながら神の御利益はさっぱり現れるようすも見られない。やがて、人々も本気で神を拝み祈る者、冗談を言い合う者など乱れが見えてきた。そのうちに拝殿を出て外で青空を見上げながら大声で「西の山から雲がぶっ立った。西の山から雲がぶっ立った」とさけぶ者もあったが、その効果はさっぱりなかった。

　神社での雨乞いをあきらめた部落民一同はイワケシュ山に雨乞いをすることに作戦を転換し、6月27日の吉日を選んで登山を開始した。やがて山頂に着いた一団は、大工伊藤正治が木を切って作った鳥居の前に祭壇らしい形を設け、佐藤竹次郎が宮司役を引き受けて、心からイワケシュ山の神に向かって雨乞いをしたのである。神は無情にもその日は期待の雨雲は見ることができず、遠く網走湖、能取湖、佐呂間湖を眺めるだけで下山した。何としてもあきらめることのできない部落民一同は相談の結果、各隣組ごとに当番制にして毎晩登山をして雨乞い祈祷をすることにした。7月2日になって、ようやく少量の雨が降ったが作物にとっては焼け石に水である。しかし部落民とっては神の霊験あらたかなるものとしてその後も一生懸命代わる代わる登山をして祈祷を続けた。

　やがて、7月13日になって10時頃、待ちに待った雨が西の山から降ってきた。部落の各農家は小躍りして「降った、降った、雨が降ったぞ」と喜びにわいたものである。

　ところが、とかく世の中は思うようにいかないもので、いったん降り始めた雨は、今度は止むを知らないごとく来る日も来る日も降り続いて、ついに思わざる常呂川の水害となって現れたのである。裸麦、小麦、えん麦などの主要作物は畑の中で水に覆われ、水が引いた後も病害に犯され、豆類も含めて収穫皆無という状態を迎えるにいたった。生活も打ち続く不景気と凶作のため、極度に苦しくなり、部落にとっては苦しい試練の時であったといえよう。（略）

（注：7月　大干ばつ後に長雨続き、凶作　「岐阜百年記念史」）

「雨乞いの話」
『豊川区開基百年記念誌』（座談会から抜粋）

江田：昭和7年には干ばつに悩まされて、雨乞いをしたという記録が残っているんだけど。
諸岡：その当時、それぞれみんな井戸を掘っていたでしょう。その井戸水も干ばつでなくなると川から水を汲んでいた。不便なので会合を開いた時に、内地では干ばつの時、雨乞いをして、そのおかげで恵みの雨が降ることがあるという話が出て、それを実行するために部落で班編制をして山に登った。6月30日は寒かったので、お互いに焼酎を持って登ったんだ。可児さんの方から登るのと城石、東さんの山を通って登る道があった。そして福山にいた佐藤米松さんが神主役で登った。
近藤：昔、神社当番とか馬頭観音の当番が頼んだのか、それともたまたま来たのか、俺が拝んでやるといって、よく拝んでもらったことがある。
清尾：雨乞いに参加したのは、この中では諸岡さんだけですか？
諸岡：俺だけだな。
近藤：俺は赤ん坊の頃だからね。
佐々木：雨乞いというのは、日中かなり暇を費やして行ったんだろうけど、本当に降るという考え方はどのくらいあったんだろうね。
司会：わらをもつかむという心境で、いよいよ困り果ててそうしたのではないかね。
諸岡：４部落の人が交替に手分けしてやったらしいね。
佐々木：願いが天まで届け、という思いだったんだろうね。
諸岡：昭和7年7月1日が川沿校の運動会だったんだ。我々が朝、山から下りる時に下を見たら霜で真っ白さ。そして、昼頃になると手亡（注：白いんげん豆）、小豆、野菜類がみな真っ黒になっちゃって大凶作さ。そして、その月の13日から雨が降って、それがまた毎日毎日降るものだから大洪水になってしまったんだ。
佐々木：そうしたら、効果があったんだなあー。
全員：ワッハッハッハー。
宮岡：効いたんだね。
諸岡：この時の大雨は、ライトコロ川から岐阜にかけて水に浸かったんだ。そして常呂川も水害になり、せっかく作った作物は流され、それで懲りて雨乞いをやらなくなったんだ。
佐々木：それから今までは、それほどの干ばつはなかったのかい？
諸岡：いや、あったけど、昭和7年の大雨に懲りて雨乞いはやらなくなったんです。
可児：また降られて洪水になったら困るからなあ。（略）